

居心地をまとう

環境に合わせて展開する空間装置の提案



豊かなまちは、ひとりひとりの手のひらサイズの活動から始まる。スケッチを描くように人々の居場所と振る舞いを生み出す装置の提案。

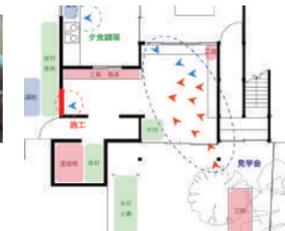
01 | 制作背景

卒業論文

- 卒業論文では、民間主体のエリアリノベーションのモデルケースである尾道市を対象に空き家のセルフリノベーション活動における改修プロセスを参与観察をもとに記述した。



施工中の現場で見学会が行われる様子。



施工中に、即席で棚が作られている様子。



端材を活用してバースタンドに見立て、お披露目をしている様子。

セルフリノベーションの現場では、その場にあるものでその時必要なものやひらめいたアイデアを即興的に具現化する営みが絶えず行われていた。

- 研究対象である迷宮堂でのセルフリノベーション活動において、4つの許容性が共有されることによって自由な場作りが営まれていると結論づけた。

1. 他者介入の許容

施工現場に旅人やご近所さん、友達がふらっと入ってきて共に時間を過ごす。

2. 道具・資源の共有

工具や食事などが共有されるため、誰でも場を囲む輪の中に入っていくやすい。

3. 自由な空間利用の許容

臨機応変に場の持つ意味合いが変化していく。

4. プリコラージュ的施工の許容

その場にあるものを用いて施工を容易にする他、場の文脈を引き継ぐ行為でもある。

point1

セルフリノベーションの現場のように、身近な場所に自身の手によって快適で豊かな「居心地」を生み出すことを支援する仮設建築の提案

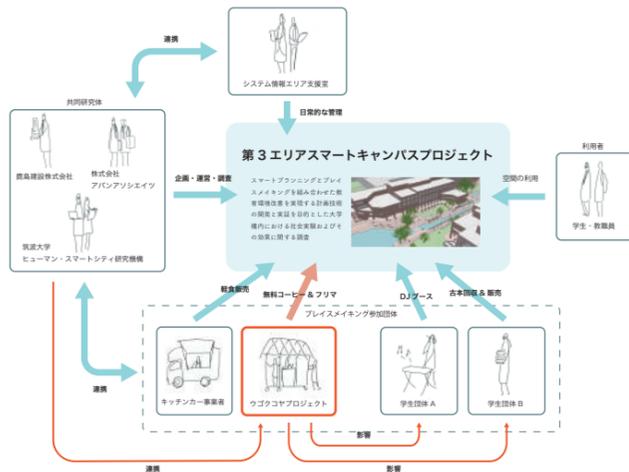
02 | 設計概要

ウゴクコヤプロジェクト

ウゴクコヤプロジェクトは2025年7月から芸術専門学群の学生4人、社会工学類の学生1人の計5人を中心に行っている即興的な場づくりを目指すプロジェクト。



2025年10月には社会工学類の研究室と協力し、屋外でコーヒーを無料提供するプレイスメイキングを行った。



三学での社会実験のステークホルダーマップ。ウゴクコヤの活動は他の学生団体にも影響を及ぼし、さらなる主体的な場づくり活動のきっかけとなった。

課題1 柔軟性の欠如

小屋の床・柱・屋根は全て固定されており、形やサイズ、外部への開き方などを変えることができない。そのため、周辺環境固有の文脈を活かした様々な形態の場の展開が難しい。

課題2 境界性の強さ

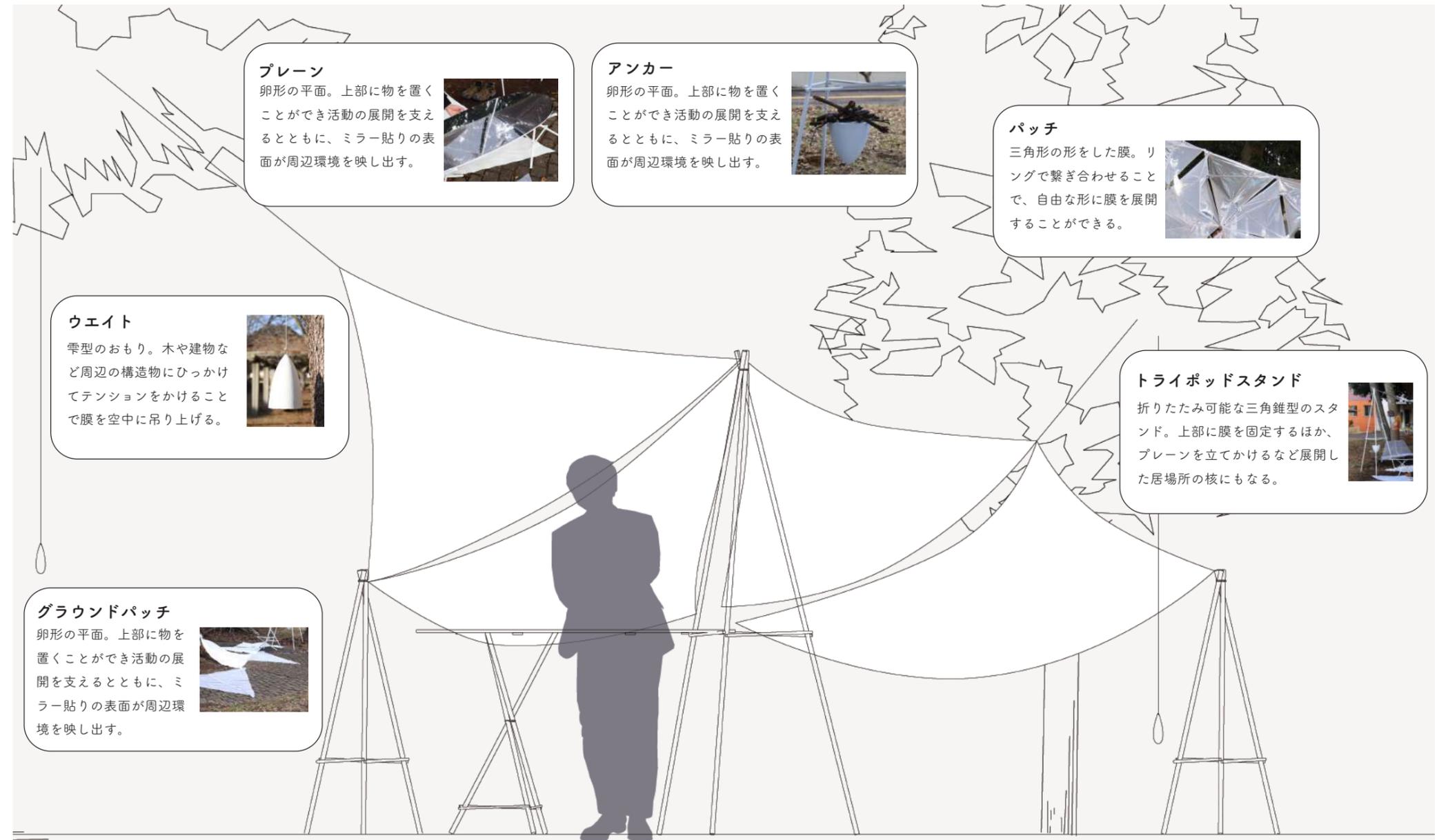
一畳の箱の中でしか場づくりの核となる活動を展開できなかった。箱の中がサービス提供者、箱の外が利用者という二項対立的な構図が生まれ、自由な人々の交わりを阻害してしまった。

課題3 鈍重な体躯

置き場所の確保、移動や積み下ろしのしづらさが、コヤを用いた場づくりを「面倒臭い」ものにしてしまった。

point2

振る舞いを固定化する「柱」「壁」「屋根」「椅子」などのスタンティックな空間のあり方を乗り越える建築



世界を反射 / 透過する膜



パッチの素材は外部の光を反射するものと透過するものの2種類がある。二種の布は1つの膜の中で様々な割合でミックスされ、それぞれ異なる視覚効果を生む。

本作品におけるパッチの組み合わせ一覧



展開のプロセス



① 場所を探す
場づくりをするための場所を探す

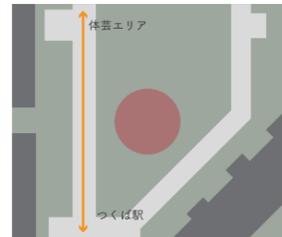
② 膜を広げる
作る膜の形を想像しながらパッチを繋げていく。

③ 膜を浮かせる
重りやスタンドを使いながら空中に膜を持ち上げる。テンションを変えて、膜の形を調節する。

④ 居場所になる
出来上がった空間で時間を過ごす。ひらひら風に揺れる膜が通りがかる人の意識を誘い込む。

03 | 場づくりの実践

ワークショップ 平砂シェアキッチン



筑波大学平砂宿舎エリアの中庭の大きな木の下をキッチンとして使ってみる。元は道から外れた誰も寄り付かない場所であった。調理スペースは道向き、膜を高く吊りあげることによって周囲に対し人の活動があることを示す。食べる空間は光を溜め込む低い幕を覆うようにかけることで落ち着ける場所を生み出し

